大斎節前主日（2月26日の聖書箇所）

Ⅰ旧約聖書（出エジプト記24章12―18節）

12主が、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らを教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける」とモーセに言われると、13モーセは従者ヨシュアと共に立ち上がった。モーセは、神の山へ登って行くとき、14長老たちに言った。「わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにとどまっていなさい。見よ、アロンとフルとがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい。」

15モーセが山に登って行くと、雲は山を覆った。16主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間、山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。17主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた。18モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

Ⅱ使徒書（フィリピの信徒への手紙3章7―14節）

7しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。8そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、9キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。10わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、11何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

12わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。13兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、14神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

Ⅲ福音（マタイ17章1―9節）

1六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。2イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。3見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。4ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」5ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。6弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。7イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」8彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。

9一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。

①語句の解説

1節「六日の後」。ペトロが信仰告白をしたのちに、イエスが初めて自分の死と復活を予告したときから数えて「六日の後」（一六13―28）。これが「七日目」の意味であれば、出二四16「七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた」という出来事を暗示しているのかもしれない。一方、黙示文学では、「七日目」は神の創造や救いの業の完成の日である（たとえば、偽典「ヨベル書」を参照）。この黙示文学の見方に従えば、イエスの変容は、彼によって実現される救いの予表であり、三人の弟子にそれを垣間見させた出来事になる。▼「ペトロ、それにヤコブと彼の兄弟ヨハネだけを」。モーセがアロン、ナダブ、アビフを伴ってシナイ山に登り、神と契約を交わしたように（出二四1）、イエスは三人の弟子を伴って、高い山に登る。▼「高い山」。山は神が顕現する場所であり、人が日常を超えた出来事に出会う場所である。モーセが十戒を与えられたのも「山」であった（出二四12）。

2節「姿が変えわり」。この語はギリシア神話では神が人間に姿を変える変身を意味する、ここではその意味ではないだろう。「イエスの姿が変えられた」とは、天上の存在に固有の輝きがイエスの内側からほとばしり出たことを指していると思われる。▼「顔」。同じ出来事を述べるマコ九3では「服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」と書くだけだが、マタイは衣の描写のほかに、イエスの顔の変化も描いている。「彼の顔が太陽のように輝いた」と「彼の上着は光のように白くなった」とは、対応する要素をもつ並行的な文章である。マタイの好むこの描写法によって、この出来事を印象深く述べ、その意義を強調する。イエスの顔の輝きは復活のキリスト（黙一16）を思い起こさせると同時に、シナイ山で神にまみえ、顔が輝いたモーセ（出三四29―30）をも想起させる。イエスは救いを完成させる「新たなモーセ」として描かれている。

3節「モーセとエリヤが彼らに現れ」。マコ九4「エリヤがモーセと共に彼らに現れた」とは違って、マタイは「預言者」の代表であるエリヤより前に、「律法」を代表するモーセを置いている。

4節「仮小屋を三つ建てましょう」。仮小屋を建てるということは、この出来事がそのまま続き、決定的な現実となって欲しいという願望を表している。

5節「雲」。雲は神の現臨のしるしであり（出四〇35）、イエスは天に上げられ、雲に覆われる（使一9）。▼「これは私の愛する子、わたしの心に適う者」。この句の背景には詩二7とイザ四二1がある。特に、イザ四二1以下は「主の僕の歌」の一つで、マタ一二18以下にそのまま引用されている。イザヤ書に歌われた「主の僕」の姿はイエスを理解する背景となっている。そのようなイエスに聞くことが弟子たちに求められている。

7節「起きなさい（起こされなさい）」。イエスの復活を表す9節の「復活する」と同じ語である。同じ語を用いることによってマタイは変容と復活を結び付けようとしているのだろう。

②ギリシア語原文の構成

1 そして　六日の後に
連れて行く　イエスは　ペトロとヤコブと彼の兄弟ヨハネを
そして　上へ運ぶ　彼らを　高い山へ　他から離して。

2 そして　彼は姿が変えられた　彼らの前で、
そして　輝いた　彼の顔が　太陽のように、
また　彼の上着は　なった　白く　光のように。
3 そして見よ　現われた　彼らに　モーセとエリヤが　語り合いながら　彼と。
4 だが答えて　ペトロは　言った　イエスに、
「主よ、　良い　です　私たちが　ここに　居ることは。
もしあなたが望むなら、　私は作るでしょう　ここに　三つの　仮小屋を、
あなたに　一つ　そして　モーセに　一つ　そして　エリヤに　一つ」。

……

5 なお　彼が　話していると
見よ　輝く雲が　覆った　彼らを、
そして　見よ　声が　雲から　言いながら、
「これは　ある　私の子で　愛された者、
この者を　私は喜んだ。
聞きなさい　彼に」。
6 そして　聞いて　弟子たちは　ひれ伏した　彼らの顔の上に
そして　彼らは恐れた　非常に。

……

7 そして　近づいた　イエスは
そして　触れて　彼らに、　彼は言った、
「起こされなさい　そして　恐れるな」
8 だがあげると　彼らの目を、
誰をも　彼らは見なかった　彼　イエスひとりのほかは。

9 そして　下へ行きながら　彼らが　山から、
命じた　彼らに　イエスは　言いながら、
「誰にも　言ってはならない　見たことを
まで　人の子が　死者たちから　起こされる」。

構成の解説

第一段落

「上へ運ぶ」。イエスはペトロとヤコブとヨハネだけを「上へ運ぶ」。イエスが運び上げた「高い山」で、彼らはイエスの変容を目にし、イエスが神の子であることを示される。「上へ運ぶ」は、最後の段落の「下へ行きながら」と対応しており、「上へ」と「下へ」によって今日の福音は囲い込まれている。「上へ」と運ばれた弟子たちはイエスの神秘をその目と耳で確かめ、「下へ」と山を下りることによって、日常へと帰って行く。

第二段落

「主よ、…もしあなたが望むなら」。並行箇所のマコ九5では、イエスは「先生（ラビ）」と呼びかけられているが、ここでは「主よ」となっている。また「もしあなたが望むなら」もマルコとルカにはない。イエスを「主」と呼び、「あなたが望むなら」という句を加える

ことによって、マタイは弟子たちがイエスの変容の意味をよく理解していたことを示そうとしている。そのため、マコ九6やルカ九33に見られる「どう言えばよいのか（自分でも何を言っているのか）、分からなかった」という説明が省かれている。

第三段落

「見よ輝く雲が」。三16―17ではイエスの受洗が次のように描写されている。

㋐見よ天が開かれ…。

㋑見よ天から声が…、

㋒これは私の愛する子、私が喜んだ者

この展開は5節の「見よ輝く雲が」以下と見事に対応している。イエスの受洗でも変容でも、神の介入は、まず㋐視覚的に述べられ、続いて㋑聴覚的に描かれ、最後に㋒イエスの本性が神からの言葉によって明らかにされる。イエスが誰であるかの啓示は受洗の時には洗礼者ヨハネに向けられたが、ここでは弟子に向けられている。

「彼に聞きなさい」。受洗の時にはこの言葉は語られなかった。ペトロは律法の代表者モーセと預言書の代表者エリヤとイエスが話すのを見て、イエスに「主よ」と呼びかけている。ペトロのイエスに対する理解は間違ってはいない。しかし、三人に一つずつ仮小屋を作ろうと提案したことに表れているように、イエスをモーセとエリヤと同列に置いている。ペトロの理解は不足しているので、神が「彼に聞きなさい」と教える。この神の声は、イエスこそが旧約聖書を成就する者であることを明らかにしている。

「そして弟子たちは聞いて、ひれ伏した…」。6・7節の描写は、マルコにもルカにも見られない。マタイは、神の声に対する弟子の反応に加え、恐れる弟子に近づくイエスをも述べている。2―8節は、構成図に示したように、

㋐変容（2―4節）、

㋑神の言葉（5―6節）、

㋒近づくイエス（7―8節）

という三つの段落に分けられる。

第四段落

「イエスは近づいた」。ここに用いられた「近づく」という語は、マタイでは多くの場合、イエスに「近づく」人に用いられて、畏敬の念を抱きながらイエスのもとに来ることを表すが、この箇所と二八18でだけ、イエスに用いられている。二八18では、復活のイエスが弟子に近づき、「世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と約束して、弟子を宣教へと派遣している。復活のイエスを描くときと同じ語を用いて、変容のイエスを描写したのは、マタイが変容の出来事を復活と結び付けたかったからであろう。イエスの変容はイエスが神の子であることを明らかにするだけでなく、山を下りて宣教という日常へと戻って行く弟子たちを励ますための出来事である

第五段落

「見たこと」。山を下りた弟子たちは「見たことを誰にも言ってはならない」と命じられる。「見たこと」は神の顕現や神が示す幻を表すのに用いられる言葉である。イエスの変容は、神がイエスの本性を弟子たちに示した出来事だったが、イエスの本性はイエスの復活のときまで隠されなければならない。

③福音の言葉から

㋐恐れる（フォベオマイ）

ⓐ一般的な用法。主の天使はヨセフに「恐れずに、マリアを妻に迎えよ」と言う（マタ一20）。エジプトから帰国したヨセフは、アルケラオが父ヘロデの後にユダヤの支配者になったと聞き「恐れた」（二22）。洗者ヨハネに殺意を抱いたヘロデ・アンティパスが、ヨハネを殺せずにいたのは、ヨハネ自身（マコ六20）とヨハネを預言者と思っていた民衆を（マタ一四5）「恐れ

ていた」からである。ユダヤ教の指導者たちは、民衆の支持を集めるイエスを「恐れた」（マコ一一18）。彼らは民衆を「恐れて」ヨハネの権威をあからさまに否定できず（マコ一一32並行）、イエスを逮捕できない（一二12並行）。そのほか、僕が主人に（マタ二五25並行）、キリスト信者がユダヤ人に（ヨハ九22）、ケファが割礼のある人々に（ガラ二12）、神殿守衛長や下役たちが民衆に（使五26）、使徒たちがかつてはキリスト教迫害者であったサウロに対して抱く恐れを表す（九26）。また、逮捕した使徒たちにローマ市民権があると知ったフィリピの高官とエルサレムの千人隊長の恐れ（一六38、二二29）、コリント教会に対するパウロの心配（2コリ一一3、一二20）、船の座礁（使二七17・29）、権力者（ロマ一三3・4）、王の命令や怒り（ヘブ一一23・27）、迫害を行う人々に対する恐れを表す（1ペト三14）。

ⓑ神的な啓示に直面した人間の恐れを表す。主の栄光に照らされた羊飼いたち（ルカ二9）、イエスが起こす奇跡や（マコ四41など）、イエスの変容や（6節、ルカ九34）、イエスの受難にまつわる出来事に接した人々（マタ二七54）、イエスの復活を知らされた婦人たちに使われる（マコ一六8）。また、神的な使信を伝える者は、しばしば使信を伝えるに先立って「恐れるな」と呼びかける。ザカリアやマリアに子供の誕生を（ルカ一13・30）、羊飼いにメシアの誕生を（二10）、婦人たちにイエスの復活を告げる天使が（マタ二八5）、また奇跡を行い（マコ六50並行）、光輝く姿に変わり（7節）、復活したイエスが（マタ二八10）、さらにはパウロに現れた主や天使が「恐れるな」と呼びかける（使一八9、二七24）。

ⓒ「畏敬の念を持つ・敬う」。多くは人間が神を畏れることを表すが（ルカ一50、一八2・4など）、エフェ五33では妻が夫を「敬う」の意味で使われる。

㋑仮小屋（スケーネー）

この語は放浪生活を送る遊牧民が寄留地での住まいとする「幕屋・天幕・仮小屋」を表す（創一二8、二六25、ヘブ一一9など）。新約聖書ではヘブライ人への手紙の用例が多い（全20回中、10回）。

今日の福音では、光輝く姿に変わったイエスと、モーセとエリヤのためにペトロが「仮小屋」を造ることを申し出る（4節・並行）。「不正な管理人」のたとえで、イエスが不正な富で友達を作りなさいと教えたのは、そうしておけば、永遠の「住まい」に迎え入れてもらえるからである（ルカ一六9）。使七43はアモ五26からの引用であり、モレクの「御輿」とは、カナン・フェニキア人の神モレクの偶像を運ぶ聖所を指す。

また、七十人訳と同じく、この語は神がモーセに命じて作らせた証しの「幕屋」を表す（使七44、ヘブ八5）。イスラエルの民にとって、神の住まいである「幕屋」は神と出会う場所であり（黙二一3）、エジプトから民を導く神が現存するしるしとなる（出二九43以下、四〇34以下）。ヘブライ人への手紙は、「見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ」というモーセへの神の命令を根拠として（出二五40、ヘブ八5）、地上の幕屋の原型である真の「幕屋」は天にあり、そこではキリストが大祭司として仕えていると述べる（八2）。黙一五5では、天にある証しの「幕屋」の神殿から、七人の天使が出て来る。証しの幕屋は、垂れ幕で聖所と至聖所が区切られている（出二六31―35）。聖所には祭司が入ることができるが、至聖所には贖罪日に大祭司だけが入ることができる（レビ一六1以下）。ヘブライ人への手紙はこの聖所を「第一の幕屋」、至聖所を「第二の幕屋」と呼ぶ（ヘブ九2・3・6）。「第一の幕屋」は旧約の幕屋または神殿を指す（九8）。キリストは動物の血ではなく、自らの血によって、人間の手によらない、さらに完全な幕屋を通って、永遠の贖いをなしとげた大祭司なのである（九11）。